

# 非可換 Lubin-Tate 理論の一般化に向けて

三枝 洋一

京都大学白眉センター／大学院理学研究科数学教室

2012 年 9 月 18 日



- Lubin-Tate 理論：  
 $p$  進体の最大アーベル拡大（ $\equiv$  局所類体論）の幾何学的実現  
高さ 1 の 1 次元形式群を用いる

- Lubin-Tate 理論：  
 $p$  進体の最大アーベル拡大 ( $\cong$  局所類体論) の幾何学的実現  
高さ 1 の 1 次元形式群を用いる
- 非可換 Lubin-Tate 理論：  
 $GL_n$  の局所ラングランズ対応の幾何学的実現  
高さ  $n$  の 1 次元形式群の変形空間 (Lubin-Tate 空間) を用いる

- Lubin-Tate 理論：  
 $p$  進体の最大アーベル拡大 ( $\equiv$  局所類体論) の幾何学的実現  
高さ 1 の 1 次元形式群を用いる
- 非可換 Lubin-Tate 理論：  
 $GL_n$  の局所ラングランズ対応の幾何学的実現  
高さ  $n$  の 1 次元形式群の変形空間 (Lubin-Tate 空間) を用いる
- 非可換 Lubin-Tate 理論の一般化：  
 $p$  進簡約代数群に対する局所ラングランズ対応の幾何学的実現  
Rapoport-Zink 空間を用いる

# Galois 群に関する記号

# Galois 群に関する記号

- $p$  : 素数
- $\Gamma = \text{Gal}(\overline{\mathbb{Q}_p}/\mathbb{Q}_p)$  : 絶対 Galois 群

# Galois 群に関する記号

- $p$  : 素数
- $\Gamma = \text{Gal}(\overline{\mathbb{Q}}_p/\mathbb{Q}_p)$  : 絶対 Galois 群

$$1 \longrightarrow I \longrightarrow \Gamma \xrightarrow{(*)} \text{Gal}(\overline{\mathbb{F}}_p/\mathbb{F}_p) \longrightarrow 1$$

# Galois 群に関する記号

- $p$  : 素数
- $\Gamma = \text{Gal}(\overline{\mathbb{Q}}_p/\mathbb{Q}_p)$  : 絶対 Galois 群

$$1 \longrightarrow I \longrightarrow \Gamma \xrightarrow{(*)} \text{Gal}(\overline{\mathbb{F}}_p/\mathbb{F}_p) \longrightarrow 1$$

- $\text{Frob} \in \text{Gal}(\overline{\mathbb{F}}_p/\mathbb{F}_p)$  : 幾何学的 Frobenius 元 ( $x \mapsto x^{1/p}$ )

# Galois 群に関する記号

- $p$  : 素数
- $\Gamma = \text{Gal}(\overline{\mathbb{Q}}_p/\mathbb{Q}_p)$  : 絶対 Galois 群

$$1 \longrightarrow I \longrightarrow \Gamma \xrightarrow{(*)} \text{Gal}(\overline{\mathbb{F}}_p/\mathbb{F}_p) \longrightarrow 1$$

- $\text{Frob} \in \text{Gal}(\overline{\mathbb{F}}_p/\mathbb{F}_p)$  : 幾何学的 Frobenius 元 ( $x \mapsto x^{1/p}$ )
- $W \subset \Gamma$  ( $\mathbb{Q}_p$  の Weil 群) :  $\text{Frob}^{\mathbb{Z}} \subset \text{Gal}(\overline{\mathbb{F}}_p/\mathbb{F}_p)$  の  $(*)$  での逆像

# $GL_n$ の局所ラングランズ対応

# $GL_n$ の局所ラングランズ対応

定理 ( $GL_n$  の局所ラングランズ対応, Harris-Taylor, Henniart)

次の 2 つの間に自然な一対一対応がある :

- $GL_n(\mathbb{Q}_p)$  の既約スムーズ表現
- Frobenius 半単純な Weil-Deligne 表現  $\phi: W \times SL_2(\mathbb{C}) \longrightarrow GL_n(\mathbb{C})$

# $GL_n$ の局所ラングランズ対応

定理 ( $GL_n$  の局所ラングランズ対応, Harris-Taylor, Henniart)

次の 2 つの間に自然な一対一対応がある :

- $GL_n(\mathbb{Q}_p)$  の既約スムーズ表現
- Frobenius 半単純な Weil-Deligne 表現  $\phi: W \times SL_2(\mathbb{C}) \rightarrow GL_n(\mathbb{C})$
- 位相群  $H$  の表現  $(\pi, V)$  が**スムーズ**とは, 任意の  $x \in V$  に対し  $\text{Stab}_H(x) = \{h \in H \mid hx = x\}$  が  $H$  の開部分群となること.

# $GL_n$ の局所ラングランズ対応

## 定理 ( $GL_n$ の局所ラングランズ対応, Harris-Taylor, Henniart)

次の2つの間に自然な一対一対応がある:

- $GL_n(\mathbb{Q}_p)$  の既約スムーズ表現
- Frobenius 半単純な Weil-Deligne 表現  $\phi: W \times SL_2(\mathbb{C}) \rightarrow GL_n(\mathbb{C})$
- 位相群  $H$  の表現  $(\pi, V)$  が **スムーズ** とは, 任意の  $x \in V$  に対し  $\text{Stab}_H(x) = \{h \in H \mid hx = x\}$  が  $H$  の開部分群となること.
- Weil-Deligne 表現  $\phi$  が **Frobenius 半単純** とは, 任意の  $w \in W$  に対し  $\phi(w)$  が半単純となること.

# $GL_n$ の局所ラングランズ対応

## 定理 ( $GL_n$ の局所ラングランズ対応, Harris-Taylor, Henniart)

次の2つの間に自然な一対一対応がある:

- $GL_n(\mathbb{Q}_p)$  の既約スムーズ表現
- Frobenius 半単純な Weil-Deligne 表現  $\phi: W \times SL_2(\mathbb{C}) \rightarrow GL_n(\mathbb{C})$
- 位相群  $H$  の表現  $(\pi, V)$  が **スムーズ** とは, 任意の  $x \in V$  に対し  $\text{Stab}_H(x) = \{h \in H \mid hx = x\}$  が  $H$  の開部分群となること.
- Weil-Deligne 表現  $\phi$  が **Frobenius 半単純** とは, 任意の  $w \in W$  に対し  $\phi(w)$  が半単純となること.
- 素数  $\ell \neq p$  に対し, Weil-Deligne 表現は連続  $\ell$  進表現  $W \rightarrow GL_n(\overline{\mathbb{Q}}_\ell)$  と一対一に対応 (Grothendieck のモノドロミー定理).  
連続  $\ell$  進表現  $\sigma$  に対応する Weil-Deligne 表現を  $\text{WD}(\sigma)$  と書く.

# $GL_n$ の局所ラングランズ対応の例

# $GL_n$ の局所ラングランズ対応の例

例 ( $n = 1$  のとき)

Art:  $\mathbb{Q}_p^\times \xrightarrow{\cong} W^{\text{ab}}$  : 局所類体論の同型とすると,

$\chi: GL_1(\mathbb{Q}_p) = \mathbb{Q}_p^\times \rightarrow \mathbb{C}^\times$  と  $W \twoheadrightarrow W^{\text{ab}} \xrightarrow{\chi \circ \text{Art}^{-1}} \mathbb{C}^\times$  が対応.

# $GL_n$ の局所ラングランズ対応の例

## 例 ( $n = 1$ のとき)

Art:  $\mathbb{Q}_p^\times \xrightarrow{\cong} W^{\text{ab}}$  : 局所類体論の同型とすると,

$\chi: GL_1(\mathbb{Q}_p) = \mathbb{Q}_p^\times \rightarrow \mathbb{C}^\times$  と  $W \rightarrow W^{\text{ab}} \xrightarrow{\chi \circ \text{Art}^{-1}} \mathbb{C}^\times$  が対応.

## 例 (一般の $n$ の場合)

- $GL_n(\mathbb{Q}_p)$  の自明表現  $\longleftrightarrow W \times SL_2(\mathbb{C})$  の ( $n$  次元) 自明表現

# $GL_n$ の局所ラングランズ対応の例

## 例 ( $n = 1$ のとき)

Art:  $\mathbb{Q}_p^\times \xrightarrow{\cong} W^{\text{ab}}$  : 局所類体論の同型とすると,

$\chi: GL_1(\mathbb{Q}_p) = \mathbb{Q}_p^\times \rightarrow \mathbb{C}^\times$  と  $W \rightarrow W^{\text{ab}} \xrightarrow{\chi \circ \text{Art}^{-1}} \mathbb{C}^\times$  が対応.

## 例 (一般の $n$ の場合)

- $GL_n(\mathbb{Q}_p)$  の自明表現  $\longleftrightarrow W \times SL_2(\mathbb{C})$  の ( $n$  次元) 自明表現
- Steinberg 表現  $\mathbf{St}_n \longleftrightarrow \phi: W \times SL_2(\mathbb{C}) \rightarrow GL_n(\mathbb{C})$  : 既約,  $\phi|_W = \mathbf{1}$   
このような  $\phi$  を  $\mathbf{Sp}_n$  と書く.

$\mathbf{St}_n : \text{Ind}_B^{\text{GL}_n(\mathbb{Q}_p)} \mathbf{1}$  の既約商 ( $B$  : 上三角行列全体)

# $GL_n$ の局所ラングランズ対応の例

## 例 ( $n = 1$ のとき)

Art:  $\mathbb{Q}_p^\times \xrightarrow{\cong} W^{\text{ab}}$  : 局所類体論の同型とすると,

$\chi: GL_1(\mathbb{Q}_p) = \mathbb{Q}_p^\times \rightarrow \mathbb{C}^\times$  と  $W \rightarrow W^{\text{ab}} \xrightarrow{\chi \circ \text{Art}^{-1}} \mathbb{C}^\times$  が対応.

## 例 (一般の $n$ の場合)

- $GL_n(\mathbb{Q}_p)$  の自明表現  $\longleftrightarrow W \times SL_2(\mathbb{C})$  の ( $n$  次元) 自明表現
- Steinberg 表現  $\mathbf{St}_n \longleftrightarrow \phi: W \times SL_2(\mathbb{C}) \rightarrow GL_n(\mathbb{C})$  : 既約,  $\phi|_W = \mathbf{1}$   
このような  $\phi$  を  $\mathbf{Sp}_n$  と書く.  
 $\mathbf{St}_n : \text{Ind}_B^{\text{GL}_n(\mathbb{Q}_p)} \mathbf{1}$  の既約商 ( $B$  : 上三角行列全体)
- 超尖点表現  $\longleftrightarrow \phi: W \times SL_2(\mathbb{C}) \rightarrow GL_n(\mathbb{C})$  : 既約,  $\phi|_{SL_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}$

**超尖点表現**とは, 非自明な放物型誘導の部分商として得られない表現のこと.

# $p$ 進簡約代数群に対する局所ラングランズ対応

# $p$ 進簡約代数群に対する局所ラングランズ対応

$G$  :  $\mathbb{Q}_p$  上の連結簡約代数群. 簡単のため,  $\mathbb{Q}_p$  上分裂と仮定.

$\widehat{G}$  :  $G$  の**双対群**.  $\mathbb{C}$  上の代数群,  $G$  のルートと余ルートを入れ換えたもの.

# $p$ 進簡約代数群に対する局所ラングランズ対応

$G$  :  $\mathbb{Q}_p$  上の連結簡約代数群. 簡単のため,  $\mathbb{Q}_p$  上分裂と仮定.

$\widehat{G}$  :  $G$  の**双対群**.  $\mathbb{C}$  上の代数群,  $G$  のルートと余ルートを入れ換えたもの.

$G$  に対する局所ラングランズ対応は一対一になるとは限らない!

# $p$ 進簡約代数群に対する局所ラングランズ対応

$G$  :  $\mathbb{Q}_p$  上の連結簡約代数群. 簡単のため,  $\mathbb{Q}_p$  上分裂と仮定.

$\widehat{G}$  :  $G$  の**双対群**.  $\mathbb{C}$  上の代数群,  $G$  のルートと余ルートを入れ換えたもの.

$G$  に対する局所ラングランズ対応は一対一になるとは限らない!

## 予想 ( $G$ に対する局所ラングランズ対応)

(1) 上から下に自然な全射があり, ファイバーは有限集合:

- $G(\mathbb{Q}_p)$  の既約スムーズ表現の同型類
- **$L$ パラメータ**  $\phi: W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \rightarrow \widehat{G}(\mathbb{C})$  の  $\widehat{G}(\mathbb{C})$  共役類

$\phi$  のファイバーを  $\Pi_\phi^G$  と書き,  **$L$ パッケージ** と呼ぶ.

# $p$ 進簡約代数群に対する局所ラングランズ対応

$G : \mathbb{Q}_p$  上の連結簡約代数群. 簡単のため,  $\mathbb{Q}_p$  上分裂と仮定.

$\widehat{G} : G$  の**双対群**.  $\mathbb{C}$  上の代数群,  $G$  のルートと余ルートを入れ換えたもの.

$G$  に対する局所ラングランズ対応は一対一になるとは限らない!

## 予想 ( $G$ に対する局所ラングランズ対応)

(1) 上から下に自然な全射があり, ファイバーは有限集合:

- $G(\mathbb{Q}_p)$  の既約スムーズ表現の同型類
- **$L$ パラメータ**  $\phi : W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \rightarrow \widehat{G}(\mathbb{C})$  の  $\widehat{G}(\mathbb{C})$  共役類

$\phi$  のファイバーを  $\Pi_\phi^G$  と書き,  **$L$ パッケージ** と呼ぶ.

(2)  $S_\phi = \pi_0(\mathrm{Cent}_{\widehat{G}(\mathbb{C})}(\phi))$  とおくと, 自然な全単射  $\mathrm{Irr}(S_\phi) \cong \Pi_\phi^G$  がある.

# $p$ 進簡約代数群に対する局所ラングランズ対応

$G$  :  $\mathbb{Q}_p$  上の連結簡約代数群. 簡単のため,  $\mathbb{Q}_p$  上分裂と仮定.

$\widehat{G}$  :  $G$  の **双対群**.  $\mathbb{C}$  上の代数群,  $G$  のルートと余ルートを入れ換えたもの.

$G$  に対する局所ラングランズ対応は一対一になるとは限らない!

## 予想 ( $G$ に対する局所ラングランズ対応)

(1) 上から下に自然な全射があり, ファイバーは有限集合:

- $G(\mathbb{Q}_p)$  の既約スムーズ表現の同型類
- **$L$ パラメータ**  $\phi: W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \rightarrow \widehat{G}(\mathbb{C})$  の  $\widehat{G}(\mathbb{C})$  共役類

$\phi$  のファイバーを  $\Pi_\phi^G$  と書き,  **$L$ パッケージ** と呼ぶ.

(2)  $S_\phi = \pi_0(\mathrm{Cent}_{\widehat{G}(\mathbb{C})}(\phi))$  とおくと, 自然な全単射  $\mathrm{Irr}(S_\phi) \cong \Pi_\phi^G$  がある.

- $\mathrm{SL}_2$  や  $U(3)$  など, いくつかのサイズの小さい群では証明されている.
- 古典群の場合, 最近大きな進展あり (Arthur の本)

# $G = \mathrm{GSp}_4$ の局所ラングランズ対応

# $G = \mathrm{GSp}_4$ の局所ラングランズ対応

$$G = \mathrm{GSp}_4 \rightsquigarrow \widehat{G} = \mathrm{GSpin}_5 = \mathrm{GSp}_4$$

この場合には, Gan-Takeda による局所ラングランズ対応の候補がある.

# $G = \mathrm{GSp}_4$ の局所ラングランズ対応

$$G = \mathrm{GSp}_4 \rightsquigarrow \widehat{G} = \mathrm{GSpin}_5 = \mathrm{GSp}_4$$

この場合には、Gan-Takeda による局所ラングランズ対応の候補がある。

## $L$ パケットの分類

$r: \mathrm{GSp}_4 \hookrightarrow \mathrm{GL}_4$  : 自然な埋め込み

$\phi: W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \longrightarrow \mathrm{GSp}_4(\mathbb{C})$  :  $L$  パラメータ  $\rightsquigarrow r \circ \phi$  : Weil-Deligne 表現  
 $\Pi_\phi^G$  が  $G(\mathbb{Q}_p)$  の超尖点表現を含むと仮定

# $G = \mathrm{GSp}_4$ の局所ラングランズ対応

$$G = \mathrm{GSp}_4 \rightsquigarrow \widehat{G} = \mathrm{GSpin}_5 = \mathrm{GSp}_4$$

この場合には、Gan-Takeda による局所ラングランズ対応の候補がある。

## $L$ パケットの分類

$r: \mathrm{GSp}_4 \hookrightarrow \mathrm{GL}_4$  : 自然な埋め込み

$\phi: W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \rightarrow \mathrm{GSp}_4(\mathbb{C})$  :  $L$  パラメータ  $\rightsquigarrow r \circ \phi$  : Weil-Deligne 表現  $\Pi_\phi^G$  が  $G(\mathbb{Q}_p)$  の超尖点表現を含むと仮定

$$(I) (r \circ \phi)|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}, r \circ \phi : \text{既約} \rightsquigarrow \Pi_\phi^G = \{\pi\}$$

# $G = \mathrm{GSp}_4$ の局所ラングランズ対応

$$G = \mathrm{GSp}_4 \rightsquigarrow \widehat{G} = \mathrm{GSpin}_5 = \mathrm{GSp}_4$$

この場合には、Gan-Takeda による局所ラングランズ対応の候補がある。

## $L$ パッケージの分類

$r: \mathrm{GSp}_4 \hookrightarrow \mathrm{GL}_4$  : 自然な埋め込み

$\phi: W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \rightarrow \mathrm{GSp}_4(\mathbb{C})$  :  $L$  パラメータ  $\rightsquigarrow r \circ \phi$  : Weil-Deligne 表現  $\Pi_\phi^G$  が  $G(\mathbb{Q}_p)$  の超尖点表現を含むと仮定

(I)  $(r \circ \phi)|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}$ ,  $r \circ \phi$  : 既約  $\rightsquigarrow \Pi_\phi^G = \{\pi\}$

(II)  $(r \circ \phi)|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}$ ,  $r \circ \phi = \varphi_1 \oplus \varphi_2$  ( $\varphi_i$  : 既約,  $\varphi_1 \not\cong \varphi_2$ ,  $\dim \varphi_i = 2$ )  
 $\rightsquigarrow \Pi_\phi^G = \{\pi_1, \pi_2\}$ ,  $\pi_1, \pi_2$  はともに超尖点表現

# $G = \mathrm{GSp}_4$ の局所ラングランズ対応

$$G = \mathrm{GSp}_4 \rightsquigarrow \widehat{G} = \mathrm{GSpin}_5 = \mathrm{GSp}_4$$

この場合には、Gan-Takeda による局所ラングランズ対応の候補がある。

## $L$ パケットの分類

$r: \mathrm{GSp}_4 \hookrightarrow \mathrm{GL}_4$  : 自然な埋め込み

$\phi: W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \rightarrow \mathrm{GSp}_4(\mathbb{C})$  :  $L$  パラメータ  $\rightsquigarrow r \circ \phi$  : Weil-Deligne 表現  $\Pi_\phi^G$  が  $G(\mathbb{Q}_p)$  の超尖点表現を含むと仮定

- (I)  $(r \circ \phi)|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}$ ,  $r \circ \phi$  : 既約  $\rightsquigarrow \Pi_\phi^G = \{\pi\}$
- (II)  $(r \circ \phi)|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}$ ,  $r \circ \phi = \varphi_1 \oplus \varphi_2$  ( $\varphi_i$  : 既約,  $\varphi_1 \not\cong \varphi_2$ ,  $\dim \varphi_i = 2$ )  
 $\rightsquigarrow \Pi_\phi^G = \{\pi_1, \pi_2\}$ ,  $\pi_1, \pi_2$  はともに超尖点表現
- (III)  $r \circ \phi = \varphi \oplus (\chi \otimes \mathbf{Sp}_2)$ ,  $\varphi|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}$ ,  $\varphi$  : 既約  
 $\rightsquigarrow \Pi_\phi^G = \{\pi_1, \pi_2\}$ ,  $\pi_1$  は超尖点表現,  $\pi_2$  は超尖点的でない

# $G = \mathrm{GSp}_4$ の局所ラングランズ対応

$$G = \mathrm{GSp}_4 \rightsquigarrow \widehat{G} = \mathrm{GSpin}_5 = \mathrm{GSp}_4$$

この場合には、Gan-Takeda による局所ラングランズ対応の候補がある。

## $L$ パッケージの分類

$r: \mathrm{GSp}_4 \hookrightarrow \mathrm{GL}_4$  : 自然な埋め込み

$\phi: W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \rightarrow \mathrm{GSp}_4(\mathbb{C})$  :  $L$  パラメータ  $\rightsquigarrow r \circ \phi$  : Weil-Deligne 表現  $\Pi_\phi^G$  が  $G(\mathbb{Q}_p)$  の超尖点表現を含むと仮定

- (I)  $(r \circ \phi)|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}$ ,  $r \circ \phi$  : 既約  $\rightsquigarrow \Pi_\phi^G = \{\pi\}$
- (II)  $(r \circ \phi)|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}$ ,  $r \circ \phi = \varphi_1 \oplus \varphi_2$  ( $\varphi_i$  : 既約,  $\varphi_1 \not\cong \varphi_2$ ,  $\dim \varphi_i = 2$ )  
 $\rightsquigarrow \Pi_\phi^G = \{\pi_1, \pi_2\}$ ,  $\pi_1, \pi_2$  はともに超尖点表現
- (III)  $r \circ \phi = \varphi \oplus (\chi \otimes \mathbf{Sp}_2)$ ,  $\varphi|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}$ ,  $\varphi$  : 既約  
 $\rightsquigarrow \Pi_\phi^G = \{\pi_1, \pi_2\}$ ,  $\pi_1$  は超尖点表現,  $\pi_2$  は超尖点的でない
- (IV)  $r \circ \phi = (\chi_1 \otimes \mathbf{Sp}_2) \oplus (\chi_2 \otimes \mathbf{Sp}_2)$  ( $\chi_1 \neq \chi_2$ )  
 $\rightsquigarrow \Pi_\phi^G = \{\pi_1, \pi_2\}$ ,  $\pi_1$  は超尖点表現,  $\pi_2$  は超尖点的でない

# $GU(2, D)$ の局所ラングランズ対応

# $GU(2, D)$ の局所ラングランズ対応

$D : \mathbb{Q}_p$  上の四元数体.  $J = GU(2, D) : \mathrm{GSp}_4(\mathbb{Q}_p)$  の内部形式.

この場合には, Gan-Tantono による局所ラングランズ対応の候補がある.

# $GU(2, D)$ の局所ラングランズ対応

$D : \mathbb{Q}_p$  上の四元数体.  $J = GU(2, D) : \mathrm{GSp}_4(\mathbb{Q}_p)$  の内部形式.

この場合には, Gan-Tantono による局所ラングランズ対応の候補がある.

$\phi : W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \longrightarrow \mathrm{GSp}_4(\mathbb{C}) \rightsquigarrow \Pi_\phi^J : L$  パッケージ

$\Pi_\phi^J = \emptyset$  かもしれない.  $\phi$  が離散的なら  $\Pi_\phi^J \neq \emptyset$ .

# $GU(2, D)$ の局所ラングランズ対応

$D : \mathbb{Q}_p$  上の四元数体.  $J = GU(2, D) : \mathrm{GSp}_4(\mathbb{Q}_p)$  の内部形式.

この場合には, Gan-Tantono による局所ラングランズ対応の候補がある.

$\phi : W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \longrightarrow \mathrm{GSp}_4(\mathbb{C}) \rightsquigarrow \Pi_\phi^J : L$  パッケージ

$\Pi_\phi^J = \emptyset$  かもしれない.  $\phi$  が離散的なら  $\Pi_\phi^J \neq \emptyset$ .

## $L$ パッケージの分類

$\phi : W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \longrightarrow \mathrm{GSp}_4(\mathbb{C}) : L$  パラメータ,  $\Pi_\phi^G$  が超尖点表現を含むと仮定. このとき, (I)~(IV) の場合それぞれに対し以下が成立:

# $GU(2, D)$ の局所ラングランズ対応

$D : \mathbb{Q}_p$  上の四元数体.  $J = GU(2, D) : \mathrm{GSp}_4(\mathbb{Q}_p)$  の内部形式.

この場合には, Gan-Tantono による局所ラングランズ対応の候補がある.

$\phi : W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \longrightarrow \mathrm{GSp}_4(\mathbb{C}) \rightsquigarrow \Pi_\phi^J : L$  パッケージ

$\Pi_\phi^J = \emptyset$  かもしれない.  $\phi$  が離散的なら  $\Pi_\phi^J \neq \emptyset$ .

## $L$ パッケージの分類

$\phi : W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \longrightarrow \mathrm{GSp}_4(\mathbb{C}) : L$  パラメータ,  $\Pi_\phi^G$  が超尖点表現を含むと仮定. このとき, (I)~(IV) の場合それぞれに対し以下が成立:

- (I)  $\Pi_\phi^J = \{\rho\}$ ,  $\rho$  は超尖点表現
- (II)  $\Pi_\phi^J = \{\rho_1, \rho_2\}$ ,  $\rho_1, \rho_2$  はともに超尖点表現
- (III)  $\Pi_\phi^J = \{\rho_1, \rho_2\}$ ,  $\rho_1$  は超尖点表現,  $\rho_2$  は超尖点的でない
- (IV)  $\Pi_\phi^J = \{\rho_1, \rho_2\}$ ,  $\rho_1, \rho_2$  はともに超尖点的でない

# 知りたいこと

# 知りたいこと

- $L$  パッケージが自然に現れる理由を幾何学を通して理解したい.
- (I)~(IV) の  $L$  パッケージの違いを幾何学的観点から観察したい.

これらは  $GL_n$  の場合には現れない, 新しい問題である.

# $GSp_{2n}$ の Rapoport-Zink 空間

# $GSp_{2n}$ の Rapoport-Zink 空間

- $\mathbb{X} : \overline{\mathbb{F}}_p$  上の勾配  $1/2$  の  $n$  次元  $p$  可除群  
(例えば,  $\overline{\mathbb{F}}_p$  上の超特異楕円曲線  $E$  に対し,  $\mathbb{X} = E[p^\infty]^{\oplus n}$ )  
 $\lambda_0 : \mathbb{X} \xrightarrow{\cong} \mathbb{X}^\vee : \text{偏極化}$  ( $\lambda_0^\vee = -\lambda_0$ )

# $\mathrm{GSp}_{2n}$ の Rapoport-Zink 空間

- $\mathbb{X} : \overline{\mathbb{F}}_p$  上の勾配  $1/2$  の  $n$  次元  $p$  可除群  
(例えば,  $\overline{\mathbb{F}}_p$  上の超特異楕円曲線  $E$  に対し,  $\mathbb{X} = E[p^\infty]^{\oplus n}$ )  
 $\lambda_0 : \mathbb{X} \xrightarrow{\cong} \mathbb{X}^\vee : \text{偏極化}$  ( $\lambda_0^\vee = -\lambda_0$ )
- $\mathrm{Nilp} : \widehat{\mathbb{Z}}_p^{\mathrm{ur}}$  代数  $A$  で  $p \in A$  が冪零元となるもの全体のなす圏

# $GSp_{2n}$ の Rapoport-Zink 空間

- $\mathbb{X} : \overline{\mathbb{F}}_p$  上の勾配  $1/2$  の  $n$  次元  $p$  可除群  
(例えば,  $\overline{\mathbb{F}}_p$  上の超特異楕円曲線  $E$  に対し,  $\mathbb{X} = E[p^\infty]^{\oplus n}$ )  
 $\lambda_0 : \mathbb{X} \xrightarrow{\cong} \mathbb{X}^\vee : \text{偏極化}$  ( $\lambda_0^\vee = -\lambda_0$ )
- **Nilp** :  $\widehat{\mathbb{Z}}_p^{\text{ur}}$  代数  $A$  で  $p \in A$  が冪零元となるもの全体のなす圏

## 定義 (Rapoport-Zink 空間)

関手  $\mathcal{M} : \text{Nilp} \rightarrow \text{Set}$  を以下のように定める :

$$\mathcal{M}(A) = \{(X, \lambda, \rho)\} / \cong$$

- $X : A$  上の  $p$  可除群,  $\lambda : X$  の偏極化
- $\rho : \mathbb{X} \otimes_{\overline{\mathbb{F}}_p} A/pA \rightarrow X \otimes_A A/pA : \text{準同種写像}$  ( $= p^{-m} \circ \text{同種写像}$ )
- $\rho^{-1} \circ (\lambda \bmod p) \circ \rho \in \mathbb{Q}_p^\times \cdot \lambda_0$

$\mathcal{M}$  は  $\widehat{\mathbb{Z}}_p^{\text{ur}}$  上の形式スキームで表現可能. **Rapoport-Zink 空間** と呼ぶ.

$\mathcal{M}$  は巨大な形式スキーム.

- 連結成分は可算無限個 ( $\deg \rho$  に対応).
- 各連結成分も準コンパクトでない.  $n = 2$  のときは,  $\mathcal{M}^{\mathrm{red}}$  は無限個の  $\mathbb{P}^1$  の鎖.

$\mathcal{M}$  は巨大な形式スキーム.

- 連結成分は可算無限個 ( $\deg \rho$  に対応).
- 各連結成分も準コンパクトでない.  $n = 2$  のときは,  $\mathcal{M}^{\text{red}}$  は無限個の  $\mathbb{P}^1$  の鎖.

## $\mathcal{M}$ への群作用

$J = \text{QIsog}(\mathbb{X}, \lambda_0)$  : 自己準同種写像の群  $\rightsquigarrow J = GU(n, D)$

$\mathcal{M} \curvearrowright J$  (右作用) :  $(X, \lambda, \rho) \cdot h = (X, \lambda, \rho \circ h)$

# $\mathrm{GSp}_{2n}$ の Rapoport-Zink 空間

$\mathcal{M}$  は巨大な形式スキーム.

- 連結成分は可算無限個 ( $\deg \rho$  に対応).
- 各連結成分も準コンパクトでない.  $n=2$  のときは,  $\mathcal{M}^{\mathrm{red}}$  は無限個の  $\mathbb{P}^1$  の鎖.

## $\mathcal{M}$ への群作用

$J = \mathrm{QIsog}(\mathbb{X}, \lambda_0)$  : 自己準同種写像の群  $\rightsquigarrow J = \mathrm{GU}(n, D)$

$\mathcal{M} \curvearrowright J$  (右作用) :  $(X, \lambda, \rho) \cdot h = (X, \lambda, \rho \circ h)$

## 志村多様体との関係 ( $p$ 進一意化)

$\mathrm{Sh} : \mathrm{GSp}_{2n}$  の志村多様体 (主偏極化付き  $n$  次元アーベル多様体のモジュライ空間)

$\mathrm{Sh}^{\mathrm{ss}} \subset \mathrm{Sh}_{\overline{\mathbb{F}}_p}$  : 超特異部分,  $\mathrm{Sh} \big|_{\hat{\mathrm{Sh}}^{\mathrm{ss}}} : \mathrm{Sh}^{\mathrm{ss}}$  に沿った形式完備化

$\rightsquigarrow \mathrm{Sh} \big|_{\hat{\mathrm{Sh}}^{\mathrm{ss}}}$  は  $\mathcal{M}$  で一意化される :  $\mathrm{Sh} \big|_{\hat{\mathrm{Sh}}^{\mathrm{ss}}} = \coprod_{i=1}^k \mathcal{M}/\Gamma_i$  ( $\Gamma_i \subset J$ )

# $\mathrm{GSp}_{2n}$ の Rapoport-Zink 塔

$M : \mathcal{M}$  のリジッド一般ファイバー ( $\widehat{\mathbb{Q}}_p^{\mathrm{ur}}$  上のリジッド空間)

# $\mathrm{GSp}_{2n}$ の Rapoport-Zink 塔

$M$  :  $\mathcal{M}$  のリジッド一般ファイバー ( $\widehat{\mathbb{Q}}_p^{\mathrm{ur}}$  上のリジッド空間)

## Rapoport-Zink 塔

$\{M_K\}_K$  :  $M$  のエタール被覆の射影系 (Rapoport-Zink 塔)

- $K$  は  $\mathrm{GSp}_{2n}(\mathbb{Z}_p)$  のコンパクト開部分群をはしる
- (偏極化付き) 普遍  $p$  可除群の  $K$  レベル構造を用いて定義

# $\mathrm{GSp}_{2n}$ の Rapoport-Zink 塔

$M$  :  $M$  のリジッド一般ファイバー ( $\widehat{\mathbb{Q}}_p^{\mathrm{ur}}$  上のリジッド空間)

## Rapoport-Zink 塔

$\{M_K\}_K$  :  $M$  のエタール被覆の射影系 (Rapoport-Zink 塔)

- $K$  は  $\mathrm{GSp}_{2n}(\mathbb{Z}_p)$  のコンパクト開部分群をはしる
- (偏極化付き) 普遍  $p$  可除群の  $K$  レベル構造を用いて定義
- $M_{\mathrm{GSp}_{2n}(\mathbb{Z}_p)} = M$

# $\mathrm{GSp}_{2n}$ の Rapoport-Zink 塔

$M$  :  $\mathcal{M}$  のリジッド一般ファイバー ( $\widehat{\mathbb{Q}}_p^{\mathrm{ur}}$  上のリジッド空間)

## Rapoport-Zink 塔

$\{M_K\}_K$  :  $M$  のエタール被覆の射影系 (Rapoport-Zink 塔)

- $K$  は  $\mathrm{GSp}_{2n}(\mathbb{Z}_p)$  のコンパクト開部分群をはしる
- (偏極化付き) 普遍  $p$  可除群の  $K$  レベル構造を用いて定義
- $M_{\mathrm{GSp}_{2n}(\mathbb{Z}_p)} = M$
- $K$  が合同部分群  $K_m = \mathrm{Ker}(\mathrm{GSp}_{2n}(\mathbb{Z}_p) \rightarrow \mathrm{GSp}_{2n}(\mathbb{Z}/p^m\mathbb{Z}))$  のときは,  
 $K_m$  レベル構造 =  $p^m$  等分点の (偏極化を定数倍を除き保つ) 自明化

# $\mathrm{GSp}_{2n}$ の Rapoport-Zink 塔

$M$  :  $\mathcal{M}$  のリジッド一般ファイバー ( $\widehat{\mathbb{Q}}_p^{\mathrm{ur}}$  上のリジッド空間)

## Rapoport-Zink 塔

$\{M_K\}_K$  :  $M$  のエタール被覆の射影系 (Rapoport-Zink 塔)

- $K$  は  $\mathrm{GSp}_{2n}(\mathbb{Z}_p)$  のコンパクト開部分群をはしる
- (偏極化付き) 普遍  $p$  可除群の  $K$  レベル構造を用いて定義
- $M_{\mathrm{GSp}_{2n}(\mathbb{Z}_p)} = M$
- $K$  が合同部分群  $K_m = \mathrm{Ker}(\mathrm{GSp}_{2n}(\mathbb{Z}_p) \rightarrow \mathrm{GSp}_{2n}(\mathbb{Z}/p^m\mathbb{Z}))$  のときは,  $K_m$  レベル構造 =  $p^m$  等分点の (偏極化を定数倍を除き保つ) 自明化

## Rapoport-Zink 塔への群作用

- $J$  は  $M_K$  に作用 (レベルを保つ).

# $GSp_{2n}$ の Rapoport-Zink 塔

$M$  :  $\mathcal{M}$  のリジッド一般ファイバー ( $\widehat{\mathbb{Q}}_p^{\text{ur}}$  上のリジッド空間)

## Rapoport-Zink 塔

$\{M_K\}_K$  :  $M$  のエタール被覆の射影系 (Rapoport-Zink 塔)

- $K$  は  $GSp_{2n}(\mathbb{Z}_p)$  のコンパクト開部分群をはしる
- (偏極化付き) 普遍  $p$  可除群の  $K$  レベル構造を用いて定義
- $M_{GSp_{2n}(\mathbb{Z}_p)} = M$
- $K$  が合同部分群  $K_m = \text{Ker}(GSp_{2n}(\mathbb{Z}_p) \rightarrow GSp_{2n}(\mathbb{Z}/p^m\mathbb{Z}))$  のときは,  $K_m$  レベル構造 =  $p^m$  等分点の (偏極化を定数倍を除き保つ) 自明化

## Rapoport-Zink 塔への群作用

- $J$  は  $M_K$  に作用 (レベルを保つ).
- $G = GSp_{2n}(\mathbb{Q}_p)$  は塔  $\{M_K\}_K$  に作用 (レベルを保たない).  
 $g \in G \rightsquigarrow M_K \longrightarrow M_{g^{-1}Kg}$  (Hecke 作用)

## 志村多様体との関係

$Sh^{[ss]} \subset Sh_{\widehat{\mathbb{Q}}_p^{ur}}$  : 超特異還元を持つアーベル多様体からなる部分 (リジッド局所閉部分集合)

$Sh_{K, \widehat{\mathbb{Q}}_p^{ur}}$  :  $K$  レベル付きの志村多様体,  $Sh_K^{[ss]} \subset Sh_{K, \widehat{\mathbb{Q}}_p^{ur}}$  :  $Sh^{[ss]}$  の逆像

$\rightsquigarrow Sh_K^{[ss]}$  は  $M_K$  で一意化される

## 志村多様体との関係

$Sh^{[ss]} \subset Sh_{\widehat{\mathbb{Q}}_p^{ur}}$  : 超特異還元を持つアーベル多様体からなる部分 (リジッド局所閉部分集合)

$Sh_{K, \widehat{\mathbb{Q}}_p^{ur}}$  :  $K$  レベル付きの志村多様体,  $Sh_K^{[ss]} \subset Sh_{K, \widehat{\mathbb{Q}}_p^{ur}}$  :  $Sh^{[ss]}$  の逆像

$\rightsquigarrow Sh_K^{[ss]}$  は  $M_K$  で一意化される

## Rapoport-Zink 塔の $l$ 進エタールコホモロジー

$l$  :  $p$  と異なる素数

$H_{RZ}^i := \lim_{\rightarrow K} H_c^i(M_K \otimes_{\widehat{\mathbb{Q}}_p^{ur}} \widehat{\mathbb{Q}}_p^{ac}, \overline{\mathbb{Q}}_l) : W \times G \times J$  の表現

## 志村多様体との関係

$Sh^{[ss]} \subset Sh_{\widehat{\mathbb{Q}}_p^{ur}}$  : 超特異還元を持つアーベル多様体からなる部分 (リジッド局所閉部分集合)

$Sh_{K, \widehat{\mathbb{Q}}_p^{ur}}$  :  $K$  レベル付きの志村多様体,  $Sh_K^{[ss]} \subset Sh_{K, \widehat{\mathbb{Q}}_p^{ur}}$  :  $Sh^{[ss]}$  の逆像

$\rightsquigarrow Sh_K^{[ss]}$  は  $M_K$  で一意化される

## Rapoport-Zink 塔の $\ell$ 進エタールコホモロジー

$\ell$  :  $p$  と異なる素数

$H_{RZ}^i := \varinjlim_K H_c^i(M_K \otimes_{\widehat{\mathbb{Q}}_p^{ur}} \widehat{\mathbb{Q}}_p^{ac}, \overline{\mathbb{Q}}_\ell) : W \times G \times J$  の表現

目標 :  $H_{RZ}^i$  を  $G$  と  $J$  の局所ラングランズ対応で記述する.

# $GL_n$ の場合

Rapoport-Zink 空間の定義を次のように変更 :

- $\mathbb{X} : \overline{\mathbb{F}}_p$  上の勾配  $1/n$  の 1 次元  $p$  可除群 ( $\doteq$  形式群)
- 「偏極化」を全て忘れる

Rapoport-Zink 空間の定義を次のように変更 :

- $\mathbb{X} : \overline{\mathbb{F}}_p$  上の勾配  $1/n$  の 1 次元  $p$  可除群 ( $\cong$  形式群)
- 「偏極化」を全て忘れる

$\rightsquigarrow$  Lubin-Tate 空間, Lubin-Tate 塔, コホモロジー  $H_{LT}^i$

- $G = GL_n(\mathbb{Q}_p)$ ,  $J = D_n^\times$   
( $D_n$  は  $\mathbb{Q}_p$  上の中心的可除代数で  $\text{inv } D_n = 1/n$  となるもの)

# GL<sub>n</sub> の場合

Rapoport-Zink 空間の定義を次のように変更 :

- $\mathbb{X} : \overline{\mathbb{F}}_p$  上の勾配  $1/n$  の 1 次元  $p$  可除群 ( $\doteq$  形式群)
- 「偏極化」を全て忘れる

$\rightsquigarrow$  Lubin-Tate 空間, Lubin-Tate 塔, コホモロジー  $H_{\text{LT}}^i$

- $G = \text{GL}_n(\mathbb{Q}_p)$ ,  $J = D_n^\times$   
( $D_n$  は  $\mathbb{Q}_p$  上の中心的可除代数で  $\text{inv } D_n = 1/n$  となるもの)

## 定理 (非可換 Lubin-Tate 理論, Harris-Taylor)

$\pi : \text{GL}_n(\mathbb{Q}_p)$  の超尖点表現,  $\phi : \Pi_\phi^{\text{GL}_n} = \{\pi\}$  となる Weil-Deligne 表現

$\Pi_\phi^{D_n^\times} = \{\rho\}$  ( $\pi \longleftrightarrow \rho : \text{Jacquet-Langlands 対応}$ )

$\sigma : W \longrightarrow \text{GL}_n(\overline{\mathbb{Q}}_\ell) : \text{WD}(\sigma) = \phi$  となる  $\ell$  進表現

$$\text{Hom}_{\text{GL}_n(\mathbb{Q}_p)}(H_{\text{LT}}^i, \pi) = \begin{cases} \sigma\left(\frac{1-n}{2}\right) \otimes \rho & (i = n-1) \\ 0 & (i \neq n-1) \end{cases}$$

# $GSp_4$ の場合

(伊藤哲史氏との共同研究)

(伊藤哲史氏との共同研究)

- $G = \mathrm{GSp}_4(\mathbb{Q}_p)$ ,  $J = \mathrm{GU}(2, D)$
- $\phi: W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \rightarrow \mathrm{GSp}_4(\mathbb{C})$  :  $L$  パラメータ  
 $\Pi_\phi^G$  が超尖点表現を含むと仮定
- $\rho \in \Pi_\phi^J$  に対し,  $H_{\mathrm{RZ}}^i[\rho] := \mathrm{Hom}_J(H_{\mathrm{RZ}}^i, \rho)^{G\text{-sm}}$  ( $W \times G$  の表現)
- $H_{\mathrm{RZ}}^i[\rho]_{\mathrm{cusp}}$  :  $H_{\mathrm{RZ}}^i[\rho]$  の超尖点部分

# $\mathrm{GSp}_4$ の場合

(伊藤哲史氏との共同研究)

- $G = \mathrm{GSp}_4(\mathbb{Q}_p)$ ,  $J = \mathrm{GU}(2, D)$
- $\phi: W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \rightarrow \mathrm{GSp}_4(\mathbb{C})$  :  $L$  パラメータ  
 $\Pi_\phi^G$  が超尖点表現を含むと仮定
- $\rho \in \Pi_\phi^J$  に対し,  $H_{\mathrm{RZ}}^i[\rho] := \mathrm{Hom}_J(H_{\mathrm{RZ}}^i, \rho)^{G\text{-sm}}$  ( $W \times G$  の表現)
- $H_{\mathrm{RZ}}^i[\rho]_{\mathrm{cusp}} : H_{\mathrm{RZ}}^i[\rho]$  の超尖点部分

## $L$ パラメータの分類 (再掲)

$r: \mathrm{GSp}_4 \hookrightarrow \mathrm{GL}_4$  : 自然な埋め込み

- (I)  $(r \circ \phi)|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}$ ,  $r \circ \phi$  : 既約
- (II)  $(r \circ \phi)|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}$ ,  $r \circ \phi = \varphi_1 \oplus \varphi_2$  ( $\varphi_i$  : 既約,  $\varphi_1 \not\cong \varphi_2$ ,  $\dim \varphi_i = 2$ )
- (III)  $r \circ \phi = \varphi \oplus (\chi \otimes \mathbf{Sp}_2)$ ,  $\varphi|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}$ ,  $\varphi$  : 既約
- (IV)  $r \circ \phi = (\chi_1 \otimes \mathbf{Sp}_2) \oplus (\chi_2 \otimes \mathbf{Sp}_2)$  ( $\chi_1 \neq \chi_2$ )

## $\mathrm{GSp}_4$ の場合 ( $\phi|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}$ のとき)

まず,  $\phi|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}$  の場合 ((I), (II) 型) を考える.

# $\mathrm{GSp}_4$ の場合 ( $\phi|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}$ のとき)

まず,  $\phi|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} = \mathbf{1}$  の場合 ((I), (II) 型) を考える.

## 主定理 A

$\phi$  : (I) 型または (II) 型,  $\rho \in \Pi_\phi^J$  : 超尖点表現

(1)  $i \neq 3$  のとき  $H_{\mathrm{RZ}}^i[\rho]_{\mathrm{cusp}} = 0$

(2)  $H_{\mathrm{RZ}}^3[\rho]_{\mathrm{cusp}} = \bigoplus_{\pi \in \Pi_\phi^G} \sigma_\pi \otimes \pi$

$\sigma_\pi$  :  $W$  の既約  $\ell$  進表現,  $\bigoplus_{\pi \in \Pi_\phi^G} \mathrm{WD}(\sigma_\pi) = r \circ \phi$

- $\phi$  が (II) 型のとき,  $\mathrm{WD}(\sigma_\pi)$  が  $\varphi_1, \varphi_2$  のどちらになるかも記述可能.
- 上の定理は  $\sum_i (-1)^i H_{\mathrm{RZ}}^i$  に対する Kottwitz の予想の精密化.

## $\mathrm{GSp}_4$ の場合 ( $\phi|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} \neq \mathbf{1}$ のとき)

次に  $\phi|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} \neq \mathbf{1}$  の場合 ((III), (IV) 型) を考える.

# $\mathrm{GSp}_4$ の場合 ( $\phi|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} \neq 1$ のとき)

次に  $\phi|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} \neq 1$  の場合 ((III), (IV) 型) を考える.

## 主定理 A'

$\phi$  : (III) 型, すなわち  $r \circ \phi = \varphi \oplus (\chi \otimes \mathbf{Sp}_2)$  と仮定

$\rho \in \Pi_\phi^J$  : 超尖点表現 (一意)

(1)  $i \neq 3$  のとき  $H_{\mathrm{RZ}}^i[\rho]_{\mathrm{cusp}} = 0$

(2)  $H_{\mathrm{RZ}}^3[\rho]_{\mathrm{cusp}} = \sigma_\pi \otimes \pi$

$\pi \in \Pi_\pi^G$  : 超尖点表現 (一意),  $\mathrm{WD}(\sigma_\pi) = \varphi$

# $\mathrm{GSp}_4$ の場合 ( $\phi|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} \neq 1$ のとき)

次に  $\phi|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} \neq 1$  の場合 ((III), (IV) 型) を考える.

## 主定理 A'

$\phi$ : (III) 型, すなわち  $r \circ \phi = \varphi \oplus (\chi \otimes \mathbf{Sp}_2)$  と仮定

$\rho \in \Pi_\phi^J$ : 超尖点表現 (一意)

(1)  $i \neq 3$  のとき  $H_{\mathrm{RZ}}^i[\rho]_{\mathrm{cusp}} = 0$

(2)  $H_{\mathrm{RZ}}^3[\rho]_{\mathrm{cusp}} = \sigma_\pi \otimes \pi$

$\pi \in \Pi_\pi^G$ : 超尖点表現 (一意),  $\mathrm{WD}(\sigma_\pi) = \varphi$

## 主定理 B

$\phi$ : (III) 型または (IV) 型,  $\pi \in \Pi_\phi^G$ : 超尖点表現 (一意)

このとき,  $\pi$  は  $H_{\mathrm{RZ}}^4$  の部分商に現れる.

# $\mathrm{GSp}_4$ の場合 ( $\phi|_{\mathrm{SL}_2(\mathbb{C})} \neq 1$ のとき)

より精密に、次が期待される。(現在、研究が進行中)

## 期待

$\phi$  : (III) 型または (IV) 型,  $\chi \otimes \mathbf{Sp}_2 \subset r \circ \phi$

$\pi \in \Pi_\phi^G$  : 超尖点表現 (一意),  $\rho \in \Pi_\phi^J$  : 超尖点的ではない表現

- $\chi \otimes \pi^\vee \otimes \rho$  は  $H_{\mathrm{RZ}}^3$  に現れる.
- $\chi \otimes \pi^\vee \otimes \mathrm{Zel}(\rho)^\vee$  は  $H_{\mathrm{RZ}}^4$  に現れる.  
( $\mathrm{Zel}$  : Zelevinsky 対合,  $\mathrm{Zel}(\rho)^\vee$  : 緩増加ではない表現)
- $H_{\mathrm{RZ}}^2 = 0$  と予想している.
- $\Pi_\phi^J = \{\rho, \rho'\}$  とすると,  $\{\rho', \mathrm{Zel}(\rho)^\vee\}$  は  $J$  の非緩増加  $A$  パッケージ.

主定理 B の証明を紹介する.

## 主定理 B (再掲)

$\phi$  : (III) 型または (IV) 型,  $\pi \in \Pi_\phi^G$  : 超尖点表現  
このとき,  $\pi$  は  $H_{RZ}^4$  の部分商に現れる.

主定理 B の証明を紹介する.

## 主定理 B (再掲)

$\phi$  : (III) 型または (IV) 型,  $\pi \in \Pi_\phi^G$  : 超尖点表現  
このとき,  $\pi$  は  $H_{RZ}^4$  の部分商に現れる.

$H_{RZ}^i$  を志村多様体のコホモロジーと結び付ける.

$\mathrm{Sh}_K^{[ss]}$  は  $M_K$  で一意化される  $\rightsquigarrow$  Hochschild-Serre スペクトル系列が存在

# 証明について

主定理 B の証明を紹介する.

## 主定理 B (再掲)

$\phi$  : (III) 型または (IV) 型,  $\pi \in \Pi_\phi^G$  : 超尖点表現  
このとき,  $\pi$  は  $H_{RZ}^4$  の部分商に現れる.

$H_{RZ}^i$  を志村多様体のコホモロジーと結び付ける.

$\mathrm{Sh}_K^{[ss]}$  は  $M_K$  で一意化される  $\rightsquigarrow$  Hochschild-Serre スペクトル系列が存在

## Hochschild-Serre スペクトル系列 (Harris, Fargues)

$$E_2^{i,j} = \mathrm{Ext}_{J\text{-sm}}^j(H_{RZ}^{6-j}, \mathcal{A})(-3) \implies \lim_{\overrightarrow{K}} H^{i+j}(\mathrm{Sh}_K^{[ss]}, \overline{\mathbb{Q}}_\ell)$$

$\mathcal{A} : \mathrm{GSp}_4(\mathbb{A}^{\infty,p}) \times J$  上の保型形式の空間

# 証明について

主定理 B の証明を紹介する。

## 主定理 B (再掲)

$\phi$  : (III) 型または (IV) 型,  $\pi \in \Pi_\phi^G$  : 超尖点表現  
このとき,  $\pi$  は  $H_{RZ}^4$  の部分商に現れる。

$H_{RZ}^i$  を志村多様体のコホモロジーと結び付ける。

$\mathrm{Sh}_K^{[ss]}$  は  $M_K$  で一意化される  $\rightsquigarrow$  Hochschild-Serre スペクトル系列が存在

## Hochschild-Serre スペクトル系列 (Harris, Fargues)

$$E_2^{i,j} = \mathrm{Ext}_{J\text{-sm}}^j(H_{RZ}^{6-j}, \mathcal{A})(-3) \implies \lim_{\rightarrow K} H^{i+j}(\mathrm{Sh}_K^{[ss]}, \overline{\mathbb{Q}}_\ell)$$

$\mathcal{A} : \mathrm{GSp}_4(\mathbb{A}^{\infty,p}) \times J$  上の保型形式の空間

$$H^i(\mathrm{Sh}_\infty^{[ss]}) := \varinjlim_K H^{i+j}(\mathrm{Sh}_K^{[ss]}, \overline{\mathbb{Q}}_\ell)$$

# 証明について

$\text{Sh}_K^{[\text{ss}]}$  : 超特異還元を持つ部分

$\text{Sh}_K^{[\text{good}]}$  : よい還元を持つ部分

$$\text{Sh}_K^{[\text{ss}]} \subset \text{Sh}_K^{[\text{good}]} \subset \text{Sh}_K$$

# 証明について

$\mathrm{Sh}_K^{[ss]}$  : 超特異還元を持つ部分

$\mathrm{Sh}_K^{[good]}$  : よい還元を持つ部分

$$\mathrm{Sh}_K^{[ss]} \subset \mathrm{Sh}_K^{[good]} \subset \mathrm{Sh}_K$$

$$\rightsquigarrow IH^i(\mathrm{Sh}_\infty) \longrightarrow H^i(\mathrm{Sh}_\infty) \longrightarrow H^i(\mathrm{Sh}_\infty^{[good]}) \longrightarrow H^i(\mathrm{Sh}_\infty^{[ss]})$$

# 証明について

$\mathrm{Sh}_K^{[\mathrm{ss}]}$  : 超特異還元を持つ部分

$\mathrm{Sh}_K^{[\mathrm{good}]}$  : よい還元を持つ部分

$$\mathrm{Sh}_K^{[\mathrm{ss}]} \subset \mathrm{Sh}_K^{[\mathrm{good}]} \subset \mathrm{Sh}_K$$

$$\rightsquigarrow IH^i(\mathrm{Sh}_\infty)_{\mathrm{cusp}} \xrightarrow{\cong} H^i(\mathrm{Sh}_\infty)_{\mathrm{cusp}} \xrightarrow{\cong} H^i(\mathrm{Sh}_\infty^{[\mathrm{good}]})_{\mathrm{cusp}} \xrightarrow{\cong} H^i(\mathrm{Sh}_\infty^{[\mathrm{ss}]})_{\mathrm{cusp}}$$

# 証明について

$\text{Sh}_K^{[\text{ss}]}$  : 超特異還元を持つ部分

$\text{Sh}_K^{[\text{good}]}$  : よい還元を持つ部分

$$\text{Sh}_K^{[\text{ss}]} \subset \text{Sh}_K^{[\text{good}]} \subset \text{Sh}_K$$

$$\rightsquigarrow IH^i(\text{Sh}_\infty)_{\text{cusp}} \xrightarrow[(1)]{\cong} H^i(\text{Sh}_\infty)_{\text{cusp}} \xrightarrow[(2)]{\cong} H^i(\text{Sh}_\infty^{[\text{good}]})_{\text{cusp}} \xrightarrow[(3)]{\cong} H^i(\text{Sh}_\infty^{[\text{ss}]})_{\text{cusp}}$$

# 証明について

$\mathrm{Sh}_K^{[\mathrm{ss}]}$  : 超特異還元を持つ部分

$\mathrm{Sh}_K^{[\mathrm{good}]}$  : よい還元を持つ部分

$$\mathrm{Sh}_K^{[\mathrm{ss}]} \subset \mathrm{Sh}_K^{[\mathrm{good}]} \subset \mathrm{Sh}_K$$

$$\rightsquigarrow IH^i(\mathrm{Sh}_\infty)_{\mathrm{cusp}} \xrightarrow[(1)]{\cong} H^i(\mathrm{Sh}_\infty)_{\mathrm{cusp}} \xrightarrow[(2)]{\cong} H^i(\mathrm{Sh}_\infty^{[\mathrm{good}]})_{\mathrm{cusp}} \xrightarrow[(3)]{\cong} H^i(\mathrm{Sh}_\infty^{[\mathrm{ss}]})_{\mathrm{cusp}}$$

(1)  $\mathbb{C}$  上の佐武コンパクト化を使う. 任意の志村多様体で成立.

# 証明について

$\mathrm{Sh}_K^{[\mathrm{ss}]}$  : 超特異還元を持つ部分

$\mathrm{Sh}_K^{[\mathrm{good}]}$  : よい還元を持つ部分

$$\mathrm{Sh}_K^{[\mathrm{ss}]} \subset \mathrm{Sh}_K^{[\mathrm{good}]} \subset \mathrm{Sh}_K$$

$$\rightsquigarrow IH^i(\mathrm{Sh}_\infty)_{\mathrm{cusp}} \xrightarrow[(1)]{\cong} H^i(\mathrm{Sh}_\infty)_{\mathrm{cusp}} \xrightarrow[(2)]{\cong} H^i(\mathrm{Sh}_\infty^{[\mathrm{good}]})_{\mathrm{cusp}} \xrightarrow[(3)]{\cong} H^i(\mathrm{Sh}_\infty^{[\mathrm{ss}]})_{\mathrm{cusp}}$$

- (1)  $\mathbb{C}$  上の佐武コンパクト化を使う. 任意の志村多様体で成立.
- (2) 今井直毅氏との共同研究. かなり一般の志村多様体で成立.

# 証明について

$\mathrm{Sh}_K^{[\mathrm{ss}]}$  : 超特異還元を持つ部分

$\mathrm{Sh}_K^{[\mathrm{good}]}$  : よい還元を持つ部分

$$\mathrm{Sh}_K^{[\mathrm{ss}]} \subset \mathrm{Sh}_K^{[\mathrm{good}]} \subset \mathrm{Sh}_K$$

$$\rightsquigarrow IH^i(\mathrm{Sh}_\infty)_{\mathrm{cusp}} \xrightarrow[(1)]{\cong} H^i(\mathrm{Sh}_\infty)_{\mathrm{cusp}} \xrightarrow[(2)]{\cong} H^i(\mathrm{Sh}_\infty^{[\mathrm{good}]})_{\mathrm{cusp}} \xrightarrow[(3)]{\cong} H^i(\mathrm{Sh}_\infty^{[\mathrm{ss}]})_{\mathrm{cusp}}$$

- (1)  $\mathbb{C}$  上の佐武コンパクト化を使う. 任意の志村多様体で成立.
- (2) 今井直毅氏との共同研究. かなり一般の志村多様体で成立.
- (3) Boyer のトリック.  $\mathrm{GSp}_4$  の特殊事情 ( $\mathrm{GSp}_{2n}$ ,  $n \geq 3$  では証明が機能しない)

もう一つの鍵は次の非尖点性.

## 定理 (非尖点性)

$i \neq 2, 3, 4$  ならば,  $G$  の超尖点表現は  $H_{RZ}^i$  の部分商には現れない.

もう一つの鍵は次の非尖点性.

## 定理 (非尖点性)

$i \neq 2, 3, 4$  ならば,  $G$  の超尖点表現は  $H_{\text{RZ}}^i$  の部分商には現れない.

- $\dim M = 3$  より,  $H_{\text{RZ}}^i \neq 0$  となるのは  $0 \leq i \leq 6$  の場合に限る.
- $2 = 3 - 1 = \dim M - \dim \mathcal{M}^{\text{red}}$ ,  $4 = 3 + 1 = \dim M + \dim \mathcal{M}^{\text{red}}$

もう一つの鍵は次の非尖点性.

## 定理 (非尖点性)

$i \neq 2, 3, 4$  ならば,  $G$  の超尖点表現は  $H_{RZ}^i$  の部分商には現れない.

- $\dim M = 3$  より,  $H_{RZ}^i \neq 0$  となるのは  $0 \leq i \leq 6$  の場合に限る.
- $2 = 3 - 1 = \dim M - \dim \mathcal{M}^{\text{red}}$ ,  $4 = 3 + 1 = \dim M + \dim \mathcal{M}^{\text{red}}$
- この定理は純局所的な手法で証明される.
- Lubin-Tate 空間に対する非尖点性の純局所的証明と方針は同様だが,  $\mathcal{M}$  が巨大であるため様々な困難が発生する.

もう一つの鍵は次の非尖点性.

## 定理 (非尖点性)

$i \neq 2, 3, 4$  ならば,  $G$  の超尖点表現は  $H_{RZ}^i$  の部分商には現れない.

- $\dim M = 3$  より,  $H_{RZ}^i \neq 0$  となるのは  $0 \leq i \leq 6$  の場合に限る.
- $2 = 3 - 1 = \dim M - \dim \mathcal{M}^{\text{red}}$ ,  $4 = 3 + 1 = \dim M + \dim \mathcal{M}^{\text{red}}$
- この定理は純局所的な手法で証明される.
- Lubin-Tate 空間に対する非尖点性の純局所的証明と方針は同様だが,  $\mathcal{M}$  が巨大であるため様々な困難が発生する.
- 証明のため, 形式隣接輪体関手の変種を導入.  
(「見えない境界」をとらえるため)

## 主定理 B (再掲)

$\phi$  : (III) 型または (IV) 型,  $\pi \in \Pi_{\phi}^G$  : 超尖点表現  
このとき,  $\pi$  は  $H_{RZ}^4$  の部分商に現れる.

## 主定理 B の証明

## 主定理 B (再掲)

$\phi$  : (III) 型または (IV) 型,  $\pi \in \Pi_\phi^G$  : 超尖点表現  
このとき,  $\pi$  は  $H_{RZ}^4$  の部分商に現れる.

## 主定理 B の証明

$GS_{p_4}(\mathbb{A})$  の尖点的保型表現  $\Pi$  を次を満たすようにとる :

- $\Pi$  は  $IH^2(\text{Sh}_\infty)$  に現れる ( $\Pi_\infty$  の条件)
- $\Pi_p \cong \pi^\vee$

( $\phi$  が (III) 型または (IV) 型であることを使う)

## 主定理 B (再掲)

$\phi$  : (III) 型または (IV) 型,  $\pi \in \Pi_\phi^G$  : 超尖点表現  
このとき,  $\pi$  は  $H_{RZ}^4$  の部分商に現れる.

## 主定理 B の証明

$GS_{p_4}(\mathbb{A})$  の尖点的保型表現  $\Pi$  を次を満たすようにとる :

- $\Pi$  は  $IH^2(\text{Sh}_\infty)$  に現れる ( $\Pi_\infty$  の条件)
- $\Pi_p \cong \pi^\vee$

( $\phi$  が (III) 型または (IV) 型であることを使う)

Hochschild-Serre スペクトル系列より,  $i+j=2$  を満たすある  $i, j$  に対し,  
 $\Pi_p$  は  $\text{Ext}_{J\text{-sm}}^i(H_{RZ}^{6-j}, \mathcal{A})$  に寄与する.

非尖点性より  $6-j \neq 5, 6$  なので,  $\Pi_p$  は  $\text{Hom}_J(H_{RZ}^4, \mathcal{A})$  に寄与する.  
したがって  $\pi$  は  $H_{RZ}^4$  に現れる.

# 証明について

主定理 A, A' もこれと似た議論で示す.  
 $\pi, \rho$  を大域化する際に工夫が必要.

主定理 A, A' もこれと似た議論で示す.

$\pi, \rho$  を大域化する際に工夫が必要.

$\Pi : \mathrm{GSp}_4(\mathbb{A})$  の尖点的保型表現を次を満たすようにとる :

- $\Pi$  は  $IH^3(\mathrm{Sh}_\infty)$  に現れる ( $\Pi_\infty$  の条件)
- $\Pi_p \cong \pi$
- $\Pi$  は  $p$  において強重複度 1 定理を満たす. すなわち,  $\mathrm{GSp}_4(\mathbb{A})$  の保型表現  $\Pi'$  が  $\Pi^p = (\Pi')^p$  を満たすなら  $\Pi = \Pi'$  となる.

(cf. Arthur の重複度予想)

# 証明について

主定理 A,  $A'$  もこれと似た議論で示す.

$\pi, \rho$  を大域化する際に工夫が必要.

$\Pi : \mathrm{GSp}_4(\mathbb{A})$  の尖点的保型表現を次を満たすようにとる :

- $\Pi$  は  $IH^3(\mathrm{Sh}_\infty)$  に現れる ( $\Pi_\infty$  の条件)
- $\Pi_p \cong \pi$
- $\Pi$  は  $p$  において強重複度 1 定理を満たす. すなわち,  $\mathrm{GSp}_4(\mathbb{A})$  の保型表現  $\Pi'$  が  $\Pi^p = (\Pi')^p$  を満たすなら  $\Pi = \Pi'$  となる.

(cf. Arthur の重複度予想)

$\rho$  に関しても類似の条件を満たすように  $\Pi^J$  へと大域化.

$\Pi^{\infty, p} = (\Pi^J)^{\infty, p}$  を満たすようにしておく.

Hochschild-Serre スペクトル系列の両辺の「 $\Pi^{\infty, p}$  部分」をとる.

# 局所的な方法

大域的な方法では、 $L$  パッケージが自然に現れる理由がはっきりしない。  
開リジッド空間の Lefschetz 跡公式を用いた局所的な研究も行った。

# 局所的な方法

大域的な方法では、 $L$  パッケージが自然に現れる理由がはっきりしない。  
開リジッド空間の Lefschetz 跡公式を用いた局所的な研究も行った。

## 定理 (開リジッド空間の Lefschetz 跡公式)

$X : \widehat{\mathbb{Q}}_p^{\text{ac}}$  上の準コンパクトかつスムーズな adic 空間

$X \subset \overline{X} : \text{コンパクト化}$

$f : X \rightarrow X : \text{固有射}, \bar{f} : \overline{X} \rightarrow \overline{X} \text{ へと延長可能と仮定}$

任意の  $x \in \overline{X} \setminus X$  に対し、 $x$  と  $\bar{f}(x)$  は  $\overline{X}$  の構成可能閉部分集合で分離できると仮定

このとき、

$$\sum_i (-1)^i \text{Tr}(f^*; H_c^i(X, \overline{\mathbb{Q}}_\ell)) = \# \text{Fix}(f)$$

# 局所的な方法

大域的な方法では、 $L$  パッケージが自然に現れる理由がはっきりしない。  
開リジッド空間の Lefschetz 跡公式を用いた局所的な研究も行った。

## 定理 (開リジッド空間の Lefschetz 跡公式)

$X : \widehat{\mathbb{Q}}_p^{\text{ac}}$  上の準コンパクトかつスムーズな adic 空間

$X \subset \overline{X} : \text{コンパクト化}$

$f : X \rightarrow X : \text{固有射}, \bar{f} : \overline{X} \rightarrow \overline{X} \text{ へと延長可能と仮定}$

任意の  $x \in \overline{X} \setminus X$  に対し、 $x$  と  $\bar{f}(x)$  は  $\overline{X}$  の構成可能閉部分集合で分離できると仮定

このとき、

$$\sum_i (-1)^i \text{Tr}(f^*; H_c^i(X, \overline{\mathbb{Q}}_\ell)) = \# \text{Fix}(f)$$

これを  $M_K$  の準コンパクト開部分集合に適用。

## 定理

$\phi: W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \rightarrow \mathrm{GSp}_4(\mathbb{C})$  : (I) 型または (II) 型の  $L$  パラメータ

- $\Pi_\phi^G$  と  $\Pi_\phi^J$  の間の指標関係を仮定  
(安定跡公式で証明できると期待している. TRSELP の場合など, 証明されている場合もある.)
- $\rho \in \Pi_\phi^J$  に対し,  $H_{\mathrm{RZ}}^i[\rho]$  が有限生成  $G$  加群になると仮定

## 定理

$\phi: W \times \mathrm{SL}_2(\mathbb{C}) \rightarrow \mathrm{GSp}_4(\mathbb{C})$  : (I) 型または (II) 型の  $L$  パラメータ

- $\Pi_\phi^G$  と  $\Pi_\phi^J$  の間の指標関係を仮定  
(安定跡公式で証明できると期待している. TRSELP の場合など, 証明されている場合もある.)
- $\rho \in \Pi_\phi^J$  に対し,  $H_{\mathrm{RZ}}^i[\rho]$  が有限生成  $G$  加群になると仮定

このとき, 任意の楕円正則半単純元  $g \in G$  に対し

$$\sum_{\rho \in \Pi_\phi^J} \theta_{H_{\mathrm{RZ}}[\rho]}(g) = 4 \sum_{\pi \in \Pi_\phi^G} \theta_\pi(g)$$

- $H_{\mathrm{RZ}}[\rho] = \sum_i (-1)^i H_{\mathrm{RZ}}^i[\rho]$
- $\theta_{H_{\mathrm{RZ}}[\rho]}, \theta_\pi$  : 指標超関数.  $G$  の正則半単純元上で局所定数関数となる.

# 局所的な方法

- $GL_n$  の場合には, Faltings, Strauch による先行研究あり.
- $W$  の  $H_{RZ}^i$  への作用については何も分からない.

# 局所的な方法

- $GL_n$  の場合には, Faltings, Strauch による先行研究あり.
- $W$  の  $H_{RZ}^i$  への作用については何も分からない.
- $M_K$  における固定点を数える際には,  $p$  進周期写像 ( $p$  可除群にその Dieudonné 加群の Hodge フィルトレーションを対応させる写像) を用いる  
     $\rightsquigarrow$   $p$  進 Hodge 理論を介して, **安定共役類**やその**移送**が自然に現れる  
    (これらは  $L$  パッケージと表裏一体の関係にある)

# 局所的な方法

- $GL_n$  の場合には, Faltings, Strauch による先行研究あり.
- $W$  の  $H_{RZ}^i$  への作用については何も分からない.
- $M_K$  における固定点を数える際には,  $p$  進周期写像 ( $p$  可除群にその Dieudonné 加群の Hodge フィルトレーションを対応させる写像) を用いる  
     $\rightsquigarrow$   $p$  進 Hodge 理論を介して, **安定共役類**やその**移送**が自然に現れる  
    (これらは  $L$  パッケージと表裏一体の関係にある)
- さらに精密な分析を行うことで, 次が示せると期待 :

$$\theta_{H_{RZ}[\rho]}(g) = \frac{4}{\#\Pi_\phi^G} \sum_{\pi \in \Pi_\phi^G} \theta_\pi(g)$$

## 他の群の場合について

- 同様の手法は,  $GU(2, 1)$  や  $GL_4$  で勾配  $1/2$  の場合にも適用可能.
- $GU(n - 1, 1)$  でも Boyer のトリックは適用可能 (Mantovan, Shen)  
 $\rightsquigarrow H_{RZ}^i$  の交代和については類似の結果が得られる可能性が高い.  
非尖点性の証明はそのままでは機能しない.
- $GU(2, D)$  の場合 ( $GSp_4$  の双対塔) も同時に考えるのが重要だと思われる (cf. Faltings 同型)